

# 生き抜く理不尽を越えて

さて、クイズです。  
町工場の新米さんが、目をおさえて大騒ぎ。金属クズが入った、痛い、助けて、病院に連れて行って、  
へたをすれば眼球が傷つきます。でもベテランの職人さんにかかれば、あっとい間に解決します。どんな方法でクズを取るのでしょうか？

町工場をテーマにした小説、ノンフィクションをかかせたら、小関智弘(77)の右にでもものはいないだろう。

東京の大田区で51年ものあいだ、旋盤工をした。その間、クビ2回、倒産と廃業を1回ずつ経験する。小関が見て、聞いて、経験してきたことが、町工場の現実なのだ。

小関が若手だったころのことだ。ひとりの見習工が指を切り落としてしまう。やっちゃったよー、と彼はフラフラ。すると、ベテランの職人が、バカヤローと言って、ほったを思いっきりたたいた。そばにいた小関は、あんた何すんだ、と職人に食ってかかる。

周りから、小関は叱られた。お前こそ分かってない。あそこでバーンとやらなかったら、あいつは倒れ、機械に頭を打って死んだらうね。あの一発で、しゃんとしただろ。

ある年の節分の夜があけた朝、ひとりの職人がこういうの



を聞いた。

みんな、ゆうべは豆をまいたか？ 福の神はよ、大豆をまいたって、町工場のおれたちなんか振り向いてくれねえ。アーモンドぐらいまかなきゃ。

「現場の人たちは、豊かなものをいっばいもっている。産業界のしわ寄せは、いつも一番弱い町工場にくるけれど、その理不尽さを越えていくのです」

直木賞、芥川賞の候補に、何度もなった。大手出版社の編集者から、作家一筋で行きましょ、といわれたこともある。「旋盤工に踏みとどまってよかった。おだてに乗っかっていたら、たいした筆力もない私はつぶれていたでしょう」

2007年秋、小関に会いたい、と2人の男がいつてきた。ひとり、大田区の町工場「豊精機」をいとなむ木村隆久(50)。音大を卒業し、オーケストラでトロンボーンを吹いたこともあったが、父親の死去で社長をついだ2代目だ。「先生に



衣装をきた劇団銅鑼のみなさん。最前列の中央左が鈴木瑞穂さん、その右が小関直人さん



小関智弘さん(左)と木村隆久さん(右)と島村茂夫さん

工場を見てもらい、アドバイスしてほしかった」

もうひとは、「劇団銅鑼」で脚本をかく小関直人(43)。町工場をテーマにした劇をつくりたい、というのだ。1972年にできたこの劇団は、人間らしく生きることは、をテーマに活動をにつづけている。

劇団の小関は、作家の小関につられて木村の工場へ。旋盤工一筋の島村茂夫(61)の横で、質問攻めにした。

08年3月、「はい、奥田製作所。」が、東京の六本木で初演された。ガンコで、一人もクビにしたことがない社長がたおれた。継いだ息子がリストラに走ると、従業員はバラバラ、倒産の危機に。そこで見えてきたものは……

ガンコな社長は、鈴木瑞穂(83)が演じた。数々の映画やドラマに出演し、映画「ゴッド・ファーザー」のマロン・ブランドの吹き替えなどもした名優である。

「町工場の人たちは、ひいひい言いながらも、生き抜いている。そのバイタリティーに、私は勇気をもらっている」

昨年2月、東京で再演。そしてことし、首都圏と長野であわせて31ステージ、来年は関西での公演が予定されている。

幕が上がってすぐ、新米従業員が、目に金属クズが入った、と騒ぐシーンがある。何人かで押さえつけて目をあけさせる。ベテランの職人が髪の毛を一本抜いてクルッと輪に。そして金属クズを、ひよっと引っかければ、一件落着。

これが、冒頭のクイズの答え。作家の小関が、新米の旋盤工だったときに経験した実話である。(中島隆)